

[026]九州大学総合研究博物館ニュース

<https://doi.org/10.15017/1786411>

出版情報：九州大学総合研究博物館ニュース. 26, pp.1-12, 2016-10-31. 九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：



The Kyushu University Museum

NEWS

九州大学総合研究博物館ニュース

n°
26



*Baerlegia dendron
truncatum*
Oct 31, 1933

October
2016

「九大百年 美術をめぐる物語」展が始まりました。

明治44 (1911) 年に九州大学が帝国大学として福岡の地に開設されてから、100年あまりが過ぎ、新しいキャンパスへの移転も終盤になっています。今回の展示は、この100年間の九州大学の教育と研究活動について、「美術」という視点で九大百年の歩みを検証する試みです。他ではみることのできないものばかりで、この大学の「美術」は必見です。

総合研究博物館第7代館長

吉田茂一郎



催事・展示クローズアップ

I

－「九大の歴史を語る什器たち～家具類と食器～」から見えるもの－ **椎木講堂での2016年度春季展示**

期間：2016年4月4日(月)～7月1日(金)

場所：伊都キャンパス椎木講堂1階ギャラリー

担当：吉田 茂二郎 総合研究博物館 館長



写真1) 旧工学部1号館の大会議室前用に製作された帽子掛け。図面も残っている(昭和5年)。



写真2) 教員机(蛇腹式、理学部、昭和14年)



写真3) 九大創立当時の備品番号札

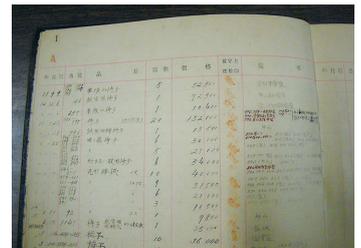


写真4) 同備品管理台帳

今回の特徴は、昨年9月に理学部が伊都キャンパスに移転した際に、理学部創設当時の数多くの歴史的什器(写真2)を収集することができたので、それらを中心にし、さらに歴史的什器プロジェクトで集められた九州大学創立(1911年)以来の大学全体の什器(写真1)や食器の数々も含めて一同に展示したことでしょう。

大学創立以来の什器類、特に明治後期から昭和初期に購入された家具類には、非常に大きな木材が利用されており、現在の国産木材では再現できない素晴らしいものです。一方で、理学部が創設された昭和14年という時代は世界大戦前で全ての物資が経済統制下にあった時代であり、理学部の什器類は、その戦時下の状況を反映したものとなっています。つまり、什器類は時代によって様式や作り方・品質が異なっており、九州大学が置かれたその時々々の経済状況や世相などを反映し、大学と大学を含む社会の歴史の一面を語る重要な資料と位置付けることができます。

また、大学の各部局では、ロゴマークを付した陶磁器の食器類をあつらえてきたことが、発掘調査による出土品や伝世品の調査・研究から明らかになってきました。これら食器類も、大学ならびに各部局の歴史を示す貴重な資料です。

加えて、大学内のすべての什器は、創立当初から一つ一つに金属の備品番号札(写真3)がはられ、備品管理台帳(写真4)で厳格に管理されています。したがって多くの什器で購入年月日、同価格等が明らかで、かつ多種多様なものが残っていたことから、色々な職階や目的、さらには年代で利用されたものが、ほぼ完全にそろっている点も評価できます。ここが市場にある一点もののアンティーク家具とは一線を画すものです。しばしば古い建物が重要文化財に指定されていますが、その室内には当時の家具が何もない場合がほとんどです。したがって、今後は九州大学の歴史的什器類を「九州大学歴史的什器群」と呼び、「室内の重要文化財」としての位置付けを提案していきたいと考えています。

Close-up Event & Exhibition

II 埋もれたものが歴史を語る

—考古学・人類学の常設展示をリニューアルし、福岡ミュージアムウィーク2016に参加しました—

期間：2016年4月18日(月)～

場所：旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

担当：米元史織 開示研究系・助教 岩永省三 一次資料研究系・教授

2016年の福岡市ミュージアムウィーク(5月14日～22日)にあわせて、当館では考古学・人類学の常設展示をリニューアルいたしました。

当館には中山平次郎先生や玉泉大梁先生が収集した考古遺物が数多く収蔵されておりますが、さらに縄文時代から近世に至る様々な時代の人骨資料も数多く収蔵されております。弥生時代の人骨に関しては約3000体収蔵されており、これは日本国内で唯一ともいえます。このような当館の収蔵資料の特色を生かし、リニューアルした考古学・人類学の常設展示では、縄文・弥生・古墳時代の遺物と人骨の展示を行っております。また、これらの考古遺物や人骨は現在も様々な研究に用いられています。その一端に触れていただくため最も基本的な道具や方法の一部もあわせて展示いたしました。

過去にどのような人々が、どのような道具を使い生きていたのか。我々は物言わぬ資料からどのようにして過去の人々の文化や習俗を明らかにするのか。

リニューアルした常設展示は現在も続いておりますので是非一度足を運んでいただけたら幸いです。



縄文・弥生・古墳時代の人骨からヒトの変化をおう

COLUMN

館員による新著紹介

書籍の出版

担当：丸山宗利 開示研究系・助教



パトリス・ブシャー 編

丸山宗利 監訳

『世界甲虫大図鑑』

東京書籍 / 2016年5月26日発行

丸山宗利 著
『だから昆虫は面白い
くらべて際立つ多様性』

東京書籍 / 2016年8月27日発行



丸山宗利 著 / 山口進 写真

『わくわく昆虫記
憧れの虫たち』

講談社 / 2016年8月25日発行

今年には3つの本を出版することができました。1つは『世界甲虫大図鑑』で、これは監訳を担当しました。600ページの大冊で、1ページに一種の詳細な解説があります。数名の翻訳者による文章を、私が原文と照らし合わせつつ訂正を行い、さらに全種に和名を付けました。2つめは『だから昆虫は面白い くらべて際立つ多様性』で、私の好きな虫を図示し、それを解説した本です。これまであまり紹介されたことのない虫が中心で、楽しい内容となりました。また私の指導している学生を中心に、若手の分類学者に新種発見と発表に関する随筆を書いてもらい、これも大変に読み応えのあるものとなりました。3つ目は『わくわく昆虫記 憧れの虫たち』で、ジャポニカ学習帳のすべての写真を撮影している山口進さんの撮影した写真に私が幼少期の思い出を重ね合わせた写真エッセイ集です。写真はすべて山口さんの撮りおろしで、たいへん豪華な内容となりました。

催事・展示クローズアップ

Ⅲ 特別展示「によろによろ! ドジョウとウナギ」

共催:九州大学大学院 農学研究院 水産増殖学研究室

期間:2016年5月23日(月)~7月15日(金)

場所:旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

担当:丸山 宗利 開示研究系・助教 担当:福原 美恵子 研究支援推進員



ポスター

九州は実は淡水魚の宝庫で、九州にしか生息しない魚類もたくさんいます。そのなかで特筆すべきものにドジョウ類があります。ドジョウ類は九州に9種類おり、そのうち4種類が九州にしか生息しない固有種・亜種です。

そもそも九州にこれだけの

ドジョウがいること自体、ほとんどの人が知りません。本展示は、まずはドジョウ類の多様性を多くの人に知ってもらうために企画されました。

本展示は若手魚類研究者で九州大学OBの中島淳さんに多大な協力を得ました。中島さんがドジョウ類の分類、生態、さらには民俗学的な解説までを書いてくださり、本展示を見ればドジョウに関するかなりのことが分かる内容となりました。



福岡市内だけに生息する絶滅危惧種のハカタスジマドジョウ

また、16個の水槽を並べ、ドジョウの生体の展示も行いました。九州を中心

に、全国の方々にご協力いただき、6属16種・亜種の日本産ドジョウ、2属3種の外国産ドジョウを展示することができました。

さらに、同じ長い魚ということで、水産増殖学研究室の望岡典隆先生のご協力を得て、ウナギの展示解説を行うこともできました。ウナギは濫獲や環境の変化で

全国的に減少しており、望岡先生はそういった危機的状況のなか、ウナギの生態解明に努められています。望岡先生にはウナギの基本的な解説や展示用の生体をご提供いただきました。



展示室に置いた水槽群

いま九州の淡水生物調査の中核を担うのは、北九州を拠点する「魚部」という団体です。高校の先生である井上大輔さんが代表として活躍され、多様性調査、展示等の普及啓蒙、さらには最近では雑誌まで発行されています。その魚部の活動の様子もご紹介いただきました。「魚部」はドジョウの各展示にもご協力いただきました。

COLUMN 館員活躍録

「ベストエッセイ2016」に選ばれました!

担当:丸山 宗利 開示研究系・助教

本企画は毎年、前年に新聞や雑誌等に掲載された随筆のなかから、林真理子さんをはじめとする作家が数十編を選定し、本として出版するというものです。今回、『文藝春秋

新年号』に掲載された「昆虫からヒトを知ること」という私の随筆が選ばれました。文章を通じて普及啓蒙を行う機会が多いので、励みになりました。

日本文藝家協会編
『ベストエッセイ2016』
光村図書出版
2016年6月25日発行



Close-up Event & Exhibition

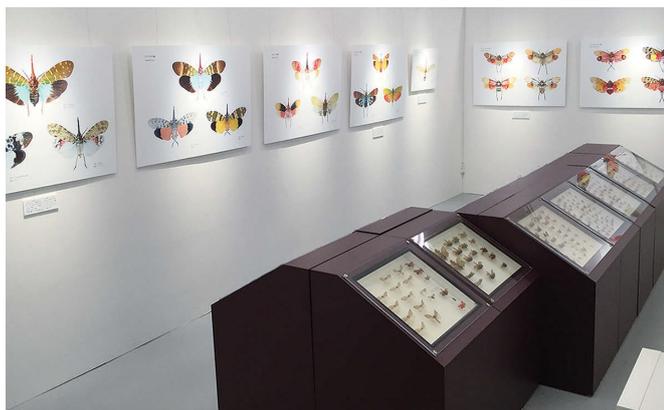
IV 特別展示「空飛ぶ水彩画 ビワハゴロモ」

—日本で初めての展示対象の試み—

期間：2016年7月25日(月)～9月16日(金)

場所：旧工学部本館3階総合研究博物館常設展示室

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教



展示風景

ビワハゴロモはウンカなどに近いカメムシ目の一群で、日本には一種も生息しないことから、よほどの昆虫好きでない限り、知る人の少ない生物です。しかし、大きく(翅を広げた幅は50～150ミリ)、なにより非常に美しい色彩をしています。その色調は、チョウなどとも違う落ち着いた雰囲気、まさに水彩画のようです。これが本展示の題を「空飛ぶ水彩画」とした理由です。本展示では、世界各地のビワハゴロモの標本を集め、それらをずらりと展示するとともに、標本写真を大きく印刷して会場に並べました。「こんな虫がいるとは知らなかった」、「こんなにきれいな

虫がいるとは知らなかった」と、多くの来場者のみなさんに驚きと感動を与えることができたようです。また、今回は安武妙恵さんと河島善隆さんのお二人に非常に美しいポスターを作ってください、それも大変好評でした。

当館では、2009年以来、どの博物館でも主役としてあつかわれてこなかった昆虫に光を当て、日本で初めての展示に挑戦してきました。「ツノゼミ」、「アリと共生する昆虫」、「カタゾウムシ」などがその代表的なものです。ツノゼミは当館の展示で火が付き、これまでほとんど知る人がいなかったのですが、その後書籍も出版され、いまではかなり有名な昆虫となりました。多くの博物館では、昆虫の展示と言えば、世界の有名大型美麗種や、地元の身近な種を展示しています。それはそれで大切なことですが、九州大学を世界的な研究の場としてとらえた場合、一般的な博物館ではできない変わった対象を展示したほうが面白いと思い、これまで続けています。来年以降は何を展示しようか、いまから思案しています。



ポスター

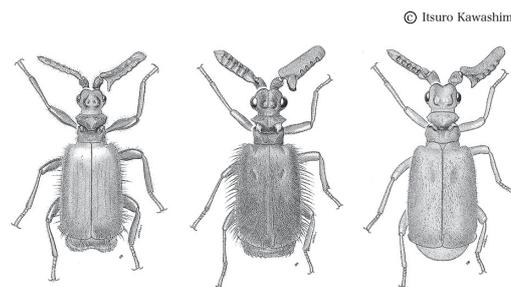
COLUMN 館員活躍録

ヒゲブトオサムシの19新種

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教

私の専門はアリと共生する昆虫です。そのなかでも特に好きなのがヒゲブトオサムシという甲虫で、太くて芸術的な触角が魅力です。このたび(5月)、日本昆虫分類学会誌に

19新種を一挙に発表しました。20年近くかけて集めた標本の一部で、ようやく世に出せてうれしく思っています。



川島逸郎画伯にお描きいただいたヒゲブトオサムシの3種の細密画

Close-up Event & Exhibition

催事・展示クローズアップ

V 「夏の教室」が 今年も開催されました

期間：2016年7月26日(火)、27日(水)
場所：旧工学部本館3階総合研究博物館第一会議室
担当：福原 美恵子 研究支援推進員
丸山 宗利 開示研究系・助教



大人も子供も網を振って。

夏休みが始まってすぐの7月26、27日に、「夏の教室ーカイコの繭からの糸取り体験とセミの標本作製体験」が、独立行政法人日本学術振興会委託事業「ひらめき☆ときめきサイエンスーようこそ大学の研究室へー」として、小中学生と保護者67人の参加を得て開催されました。農学研究院の伴野豊

准教授からはカイコの生活史や科学研究の中での役割、本館丸山宗利助教からは海外での昆虫調査について、生体や標本も示して講義いただきました。続く実習では、スタッフの丁寧な指導を受け、繭から糸を取りより紐を作り、構内で自ら採集したセミを用いて本格的な昆虫標本作製しました。本教室の体験が、子供たちの自然界や研究への興味を育てるタネになればと願っています。



カイコってフワフワ!

VI キッズ・ミュージアム ・スクール

ー子どもの疑問に答える大学博物館ー

期間：2016年7月2日(土)
場所：総合研究博物館(旧工学部本館4階会議室、剥製標本展示室、骨格標本展示室)
担当：緒方 泉 九州産業大学美術館・教授

「どうして鳥の骨は薄くて、細いのですか？」
「空を飛ぶにはなるべく体を軽くしなくてはいけないよね。それぞれの生活スタイルにあった体が作られていくんだね。少し難しいかもしれないけれど、それを進化と言うんだよ」これは、文化庁事業「キッズ・ミュージアム・スクール」(九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海の中道海洋生態科学館、九州産業大学美術館で実行委員会を組織)の一場面。

参加した小学3年生から6年生15名は、丸山宗利先生、米元史織先生の案内で動物の剥製・骨格標本を見学しました。実物資料を見たり、触ったりすると、子どもたちに沸々と疑問がわき上がり、それを両先生にぶつけると、サッと回答が得られます。学校では体験できない実物資料を使ったスクールが実現しました。このスクールは、館種が異なるミュージアムの体験活動を通じて、子どもたちの①コミュニケーション力②観察力・触察力③読解力・語彙力④表現力⑤健康度を高めるという目標を設定しています。今後は福岡市動物園、福岡市美術館、九州産業大学美術館で活動が続きます。



剥製標本を説明する丸山先生



骨格標本を観察する参加者

Series : Newly Discovered Materials

連載：移転で新たに見つかる資料群

(1) 移転で新たに見つかる資料群

三島 美佐子 開示研究系・准教授 専門：植物系統学



思いもよらない所に残っていた工作機械



手前半分を下ろしてもまだ凄い状態の中2階



本当に色んな物が出てきました

今からさかのぼること10年。平成18年は、工学部移転に伴い空いたスペースを利用して、当館が博物館らしい活動をできるようになった年でした。当館の拠点が旧工学部本館3階に移動し、同階の教室を改修した常設展示室がオープン。念願の地学系と生物系の実験室も1部屋ずつ、そして植物、昆虫、地学それぞれの収蔵室を2室ずつ構えることができました。また、旧工学部知能機械実習工場も一部改修され、第一分館としてスタートしました。第一分館には、馬出キャンパスから骨格標本(旧比較社会文化研究所蔵)が、また、旧応力研生産研本館から鉱物鉱石標本(旧理学部所蔵)が移設されました。当時、箱崎キャンパスの最終移転は「まだまだ遠い先の話」で現実味もなく、ようやく得られたこれら博物館環境で、できうる限りの資料整理や資料公開を一心不乱に(?)すすめていたのです。

そして平成27年。いよいよ第一分館を含むエリアが更地化されることが確定し、第一分館に収蔵・保管していた

資料を移動させることになりました。ほとんど何もなかった10年前とは異なり、今回の移設では、上述した骨格標本や鉱物鉱石標本をはじめ、工作機械、鑄造・鍛造資料、考古資料、木製什器、展示具など資料は多岐にわたり、かつ収蔵棚などを含め1万点近い分量です。岩永先生が核となりすすめられた移設物品のリスト作成や移転先の調整にはほぼ2ヶ月、移動作業にもまる3ヶ月が費やされました。

さて、この連載の本题は、ここからです。資料をすっきり移動して、がらんとした第一分館でしたが、南ウイングにあった旧木工室の中2階には、いつのころからのものかわからないような「ゴミ」が、山と積まれていました。その総量たるや、平置にして100平米の一区画いっぱいを占めるほど。でもそんな「ゴミの山」の中から、長らく忘れ去られていたと思われる様々な歴史的資料が出てきたのです。この連載では、そんな「発掘資料」をはじめ、移転の過程で新たに見いだされた資料の数々を紹介していきます。

COLUMN 館員活躍録

NHKラジオ「夏休み子供科学電話相談」に出演しました

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教

この夏、NHKラジオの名物番組、「夏休み子ども科学電話相談」に出演しました。今年はオリンピックの関係で放送回数が少なかった

のですが、8月の1日、2日、23日、24日の4回を担当させていただきました。小さい方たちの質問はどれも難しくて悩まされましたが、逆に目から鱗の落ちる面白い

質問も多く、全体に楽しく、とても良い経験になりました。毎年の昆虫教室でいつも質問時間を設けているのですが、そこでの経験も少し役に立ちました。



NHKラジオ第1放送

Rescue Report

緊急報告

熊本・大分地震による地域博物館の被害と今後の課題

前田 晴良 分析技術開発系 池上 直樹 御船町恐竜博物館 松田 博貴 熊本大学自然科学研究科 北村 晃寿 静岡大学理学部地球科学科



写真1) 熊本大学の実験室で散乱する分析機器



写真2) 落下・大破した恐竜の頭蓋骨
(御船町恐竜博物館)



写真3) 余震の中で続く修復作業
(御船町恐竜博物館)

今年4月14日に起きた前震および16日の本震に始まる一連の熊本・大分地震によって、熊本大学や各大学の研究施設が大きな被害を受けました(写真1)。

他方、九州中部は日本列島形成史の上で非常に重要な場所であるため、そこでしか見られない貴重な地質・古生物学標本を所蔵・展示している各自治体の自然史博物館や資料館が数多く存在します。これらの施設は、古生物学をはじめとする自然史科学の研究教育や地域の社会教育において非常に大きな役割を担ってきました。しかし、今回の地震によって地域の博物館・資料館も甚大な被害を受けたことはあまり報道されません(写真2、3)。

震災から3ヶ月以上がたち、大学やその附属施設の復興計画はようやく動き始めました。ところが地域の博物館・資料館は、所属する自治体・テーマ・規模がまちまちであるため、国の対応窓口が不明確で、復旧支援の申請先すら未だにわからないのが現状です。

そこで私たちは、大学・博物館という組織の枠を超えた横の連携のもとに、日本古生物学会や日本地質学会など関連する学協会と緊密に協力して、震災直後から地域博物館・資料館を視察し、被害の実態調査を進めてきました。その結果を取りまとめ、千葉・幕張メッセで開かれた日本地球惑星科学連合(JpGU)のセッション(5月下旬)や、京都大学生存圏研究所で開かれた地学教育シンポジウム(7月末)で発表し、大きな反響をよびました。地域の博物館や資料館の復興に「オール地学」で取り組もうという機運が生まれたのです。

今回の地震災害にあわれた大学・研究所はもとより、被災地域の博物館・資料館や標本群が速やかに復旧し、今後も研究教育拠点として活躍されることは、多くの人たちの共通の願いです。今後、私たちは日本古生物学会・日本地質学会・日本地球惑星科学連合(JpGU)・日本自然史学会連合・日本分類学会連合など関連学協会との連携をさらに深め、日本学術会議をとおして被災地の復興支援を国に働きかけてゆく所存です。

伊都キャンパス ウェスト1号館C棟2階メインエントランスにて/土日祝は閉館

新キャンパス理学部エントランスホールでの展示

担当: 三島 美佐子 開示研究系

昨年(平成27年)夏に理学部は伊都キャンパスに移転しました。そのエントランスホールで平成28年2月17日にオープンした展示

のうち立ちケース4台の展示を担当しています。今後も、当館所蔵の本物の資料をとおして、科学の基礎・基本をふりかえるような構成にしていく予定です。伊都キャンパスにお越しのさいには、是非お立ち寄り下さい。



博物館担当が担当している展示部分

COLUMN 博物館の活動

Series : Research at the Kyushu University Museum

シリーズ・九大博物館での研究の紹介

踏査旅行

イギリス調査旅行記ーヨーク地方の都市と農村ー

岩永 省三 一次資料研究系 専門:考古学

イギリスは大陸と近い島国であり、そこで生じた様々な歴史的・文化的事象が、至近にある大陸からの人・物・情報の流入の影響を受け続けた点から、日本での歴史的な事象を研究する際に、比較研究の対象として好適である。その一方、イギリスでは、鉄器時代から中世まで、大陸からの大規模な異民族の流入(ケルト人→ローマ人→アングロ人・サクソン人→デーン人→ノルマン人)と覇者の交替が繰り返されたことから、人間集団の移動を伴う文化変容の様々なパターンの研究の格好な素材となる。

ヨーク地方はブリテン島の東半中央に位置し、南西部はリーズ、シェフィールドなど大都市を擁する工業地帯であるが、その他は自然豊かな土地である。今回は古都ヨークとその北・東側を訪問

し、都市の遺跡と古い教会が収蔵する墓葬にかかわる石造物を見てきた。訪問地をいくつか紹介しよう。

ヨーク(York)はローマ帝国の北進のための要塞エボラカム(Eboracum)から出発し、ブリテン島の覇者となった様々な民族が、政治的・軍事的・宗教的拠点として用い続けた重要な都市である。ヴァイキング時代には

王国の首都ヨルヴィク(Jorvik)となり、ノルマン朝時代にはいったん破壊された後にロンドンに次ぐ都市として整備された。現在も街には重層的歴史を示す建物・遺構が多く残り、総合博物館であるヨークシャー博物館、ヨルヴィク・バイキング・センターなどがある。後者はイギリスに多いアトラクション型の展示施設である。

スカーバラ(Scarborough)は、サイモンとガーファンクル

の『スカボロ・フェア』で知られるが、ローマ帝国がヨーク地方北東海岸に設置した狼煙台の一つが半島状に突出した高台に設けられ、ローマ撤退後、プランタジネット朝～ヨーク朝に堅固な城が築かれ王宮としても用いられた。広大な城跡は綺麗に整備公開されている。

一方、農村部は延々と続く牧場・麦畑であり、視野に入る範囲には自分と羊しかいないような小道を、毎日10km前後歩いて村々の小さな教会を訪ね歩き、アングロ・サクソン期～バイキング時代の墓標彫刻を見て回った。東洋人がいきなり教会に現れ石造物を見せてほしいと言っても全く怪しまれず、敬虔な巡礼と間違われたのには苦笑した。



緑豊かな村の景観



ローマ時代要塞の城壁の塔(ヨーク)



村の小さな教会



堅固なスカーバラ城と北海

Series : Research at the Kyushu University Museum

シリーズ・九大博物館での研究の紹介

「教育遺産」としての動物骨格標本群 — 進藤篤一教授(帝大医学部)の遺したもの —

松岡 廣繁 京都大学大学院理学研究科 専門:古生物学

舟橋 京子 比較社会文化研究院 専門:人骨考古学 米元 史織 開示研究系 専門:人類学

九州大学総合研究博物館には帝大時代の医学部解剖学教室に由来する多くの動物骨格標本が収蔵されている。合計約150点に及ぶコレクションは、優美な展示ケースと相まって、見る者の心を奪う。

しかしながら、この標本群の来歴は星霜に埋もれ、『九州大学百年の宝物』(2011年刊)などでも簡単に触れられるだけであった。最近になって本標本群の由来を調査開始したところ、実に熱意をもって標本蒐集にあたり

は京都帝国大学福岡医科大学時代(現・九州大学医学部)の卒業生で、明治43(1910)年 助手に採用され、明治45年1月から大正3(1914)年にはドイツなど欧州に留学、帰国後助教授に任ぜられるとともに、解剖学教室第三講座の分担となった。翌大正4年には、年初より第三講座の単独担当となり、4月には比較解剖学の課外講義を、9月には正課解剖学の講義をそれぞれ開始した。同年末に教授に昇進。それまでの解剖学教室教授が、

小山龍徳先生は長崎医学専門学校教授からの移動、櫻井恒次郎先生は東京帝国大学医科大学出身であったのに対し、初めての「九大プロパー」の教授であった。

進藤教授にたどり着いたヒントは、骨格標本のいくつかに残存する「ラベル」であった。作成年代を示すラベルは少ないのであるが、いずれも大正3年あるいは4年の作成となっている。そこで九州帝国大学医学部の『二十五年史』(1928年刊)を引くと、「大正三年度より大正五年度に渡りては比較解剖学骨格標本の蒐集を計り、現時保存せる最大部分のものは、此の頃に集められしものとす」との記述が見え、符合する。大正3年こそ、進藤先生がドイツ留学から帰国した年で、まさに九州帝国大学医学部に新しい講義が始まる時であった。

進藤先生はドイツ留学中に受けた講義に感銘し比較解剖学に魅かれたようである。

進藤先生の教授在職25年を記念した出版物『龍落子』(1941年刊)には、先生の講演録や手紙などが多数収録されている。この中の「明治四十五年五月十二日 独逸ゲッチンゲンより櫻井先生宛の手紙」で、ある先生の

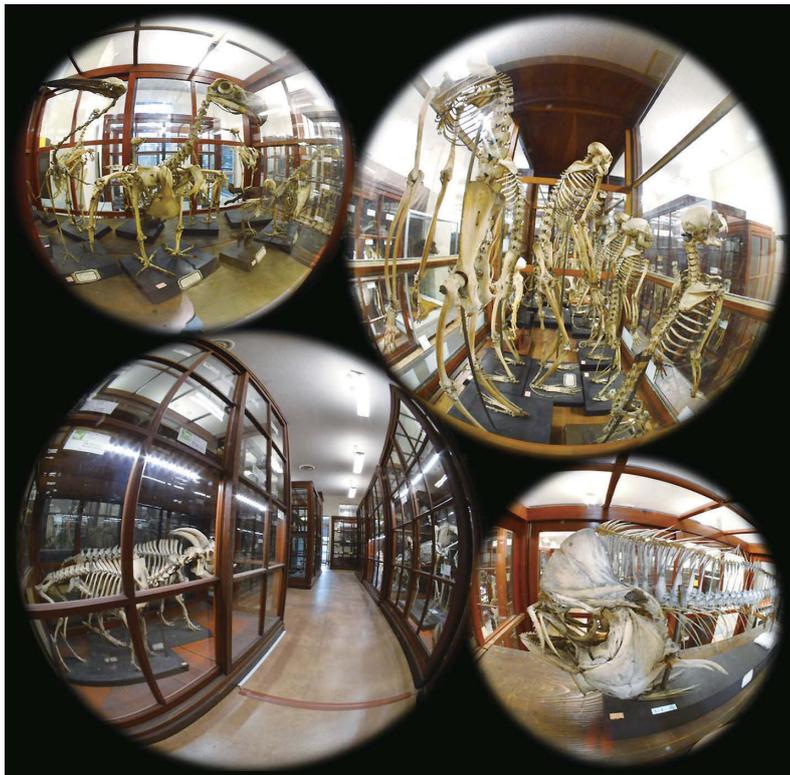


写真1

かつそれを解剖学の講義に活用していた一人の教授の存在が浮かび上がった。

その教授とは、大正から昭和初期にかけて長く解剖学教室教授を務められた、進藤篤一先生である。進藤先生



Event & Exhibition Info.

催事予告

公開展示

九大百年 美術をめぐる物語

期間：2016年10月8日(土)～11月13日(日)

メイン会場：福岡県立美術館

サテライト会場Ⅰ：九州大学総合研究博物館

サテライト会場Ⅱ：九州大学医学歴史館



ポスター

県立美術館との共催で、九大にまつわる美術とその周辺についての展示を開催。メイン会場の県美では、九大を描いた作品や、九大ゆかりの作家と作品を展示。サテライト会場の当館常設展示室、馬出キャンパスの医学歴史館では、それぞれ科学描画、ムラージュを中心に展示。

10/15 国際シンポジウム「大学と美術の可能性を求めて」@旧工学部本館1階大講義室

10/22 11/5 連続セミナー「九大百年」@県立美術館

10/21 11/11 ミュージアムカフェ「音楽と美術の夕べ」@旧工学部本館4階会議室

10/8 11/12 ギャラリートーク@県立美術館

写真1) 解剖学教室由来骨格標本群の様子(魚眼レンズ撮影)

左上:イヌワシ他鳥類。右上:サル類各種。

左下:陳列ケースが並ぶ様子。左手のケース中の骨格標本はヤギ。右下:シイラ。

写真2) 「標本室に於ける進藤教授」九州大学大学文書館アーカイブスより。

大正4年(1915年)撮影

写真3) 101年前と同じポーズで…

進藤教授とともに写っていたツキノワグマ(奥)と

ヤギの骨格標本。平成28年(2016年)撮影

講義が「大に我が意を得たるもの」であったことを楽し気な筆致で伝えている。どうやらその講義は系統発生に関するもので、解剖学に「ストーリー」を持たせる内容であったらしい。これならば理解が進み学習効果も高いと、将来自分が講義する時を想定しつつ受講していた姿が浮かび上がる。

進藤先生の比較解剖学の講義をうかがう材料として、大正5年の講演「人間の腕、脚と脊椎動物の四肢との比較話」(『龍落子』収録)がある。生物とは何かから説き起こし、古生物も登場させながら脊椎動物における器官の相同・相似を論じて、最後の段ではヒトも動物界の一員であることを描き出している。そして進藤先生は講演をこうしめる。

「かかる事が明らかに解説せられるのは学問のお蔭である。面白いものは実に学問である。」



写真2



写真3

「面白いものは実に学問である。」なんと晴れやかな一言であろう。これまで本標本群については、収容種数の豊富さなど「骨格標本」としての価値が利用されてきた。それに加えて、真の価値は、これが教授の純粋な学究姿勢と教育の証拠であること、そしてこれにより幾多の後進が育ち学問が発展してきた、学問の歴史そのものであることであろう。九州大学が、また我が国が誇るべき優れた「教育遺産」といえよう。

※今回、京都大学の松岡廣繁先生には特別にご執筆いただきました。お礼申し上げます。(舟橋京子・米元史織)

Personnel Changes

人事往来

着任・退職

平成28年3月31日付けで、

益森治巳が特定有期事務職員として着任いたしました。

専門研究員

中牟田義博 平成28年4月1日～平成29年3月31日

永淵 修 平成28年4月1日～平成29年3月31日

中澤 暦 平成28年4月1日～平成29年3月31日

澤渡 浩之 平成28年6月1日～平成29年3月31日

赤司 友徳 平成28年7月1日～平成29年3月31日

Activities of Exhibitions & Conferences

展示・講演会関係の活動状況

常設展示

- 九州大学標本・資料展示リニューアル
考古・人類展示「埋もれたものが歴史を語る」
期間：平成28年4月18日(月)～通年
場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
主催：九州大学総合研究博物館

特別展示

- 伊都キャンパス 椎木講堂展示
「九大の歴史を語る仕器たち一家具類と食器」
期間：平成28年4月4日(月)～7月1日(金)
場所：椎木講堂ギャラリー・展示コーナー
主催：九州大学
共催：九州大学総合研究博物館・アジア埋蔵文化財研究センター・大学図書館・百年史編集室
- 「にほんブログ村!ドジョウとウナギ」
期間：平成28年5月23日(月)～7月15日(金)
場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
主催：九州大学総合研究博物館
共催：九州大学農学研究院水産増殖学研究室
- 「空飛ぶ水彩画ーピワゴロモ」
期間：平成28年7月25日(月)～9月16日(金)
場所：箱崎キャンパス総合研究博物館常設展示室
主催：九州大学総合研究博物館・九州大学農学研究院昆虫学教室

特別企画

- 「地質の記念日 プロフェッサー前田の化石講座」
期間：平成28年5月14日(土)
場所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階10番講義室
- ひらめき☆ときめきサイエンス「夏の教室」
期間：平成28年7月26日(火)カイコの繭からの糸取り体験
平成28年7月27日(水)セミの標本作製体験
場所：箱崎キャンパス旧工学部本館3階会議室
- 開学記念事業に伴う一般公開
期間：平成28年5月14日(土)
場所：総合研究博物館第三分館・工学部列品室・4階第二会議室
- 福岡ミュージアムウィーク2016参加に伴う施設公開
期間：平成28年5月14日(土)～22日(日)
(22日は、変電設備定期点検による箱崎地区全停電のため休館)
場所：総合研究博物館常設展示室
- オープンキャンパスに伴う施設公開
期間：平成28年8月6日(土)、7日(日)
場所：総合研究博物館常設展示室

総合研究博物館ウェブコンテンツの紹介

九州大学総合研究博物館では、公式ウェブサイトの他にも、様々なウェブサービスを活用して最新情報やコンテンツを発信しています。ぜひアクセスしてみてください。

- 公式HP <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp>
- Facebook
日本語 [facebook.com/KyudaiMuseum](https://www.facebook.com/KyudaiMuseum)
英語 [facebook.com/TheKyushuUniversityMuseum](https://www.facebook.com/TheKyushuUniversityMuseum)
- Twitter twitter.com/Kyudai_Museum
- Vimeo vimeo.com/KyudaiMuseum
- Flickr [flickr.com/KyudaiMuseum](https://www.flickr.com/photos/KyudaiMuseum)

展示協力

- 伊丹市昆虫館企画展「きらめく甲虫」
期間：平成28年4月20日(水)～7月4日(月)
場所：公益財団法人伊丹市文化振興財団伊丹市昆虫館
監修・協力：丸山宗利
- 志摩歴史資料館夏期企画展
／九州大学総合研究博物館社会連携事業「きらめく甲虫」
期間：平成28年7月23日(土)～9月11日(日)
場所：糸島市立志摩歴史資料館
主催：糸島市立志摩歴史資料館
展示監修：丸山宗利

ラジオ出演

- NHKラジオ
(NHKラジオ第一放送とNHKワールド・ラジオ日本)
「夏休み子ども科学電話相談」
(丸山宗利)
平成28年8月1日(月)、2日(火)、23日(火)、24日(水)

サテライト巡回展示

- 福岡空港サテライト
展示は平成28年9月をもって終了いたしました。

博物館施設一般公開

中等教育支援

- 明治学園中学高等学校 自然科学部
九州大学博物館実習
期間：平成28年5月4日(水)9時～17時
場所：箱崎キャンパス博物館・標本庫
- “昆虫博士”丸山宗利先生と行く昆虫採集&標本作り教室
期間：平成28年7月28日(木)
場所：糸島市立志摩歴史資料館

学内連携企画

- 中央図書館シリーズ展示ー標本にみる九州大学の研究ー第6弾「九州大学の昆虫標本 part.3」
期間：平成28年1月13日(水)～10月(10月以降入れ替え予定)
場所：中央図書館(箱崎)2階エントランス常設展示コーナー
- 理学部エントランスホール展示(博物館担当部分)
「総合研究博物館 エントランス展I」
期間：平成28年2月17日(水)～継続中
場所：伊都キャンパスウェスト1号館エントランスホール

学外催事協力

- 博物館、動物園、美術館で学ぶ動物のいろいろ
「キッズ・ミュージアム・スクール」
期間：平成28年7月2日(土)、8月6日(土)、27日(土)、9月24日(土)
場所：糸島市立志摩歴史資料館
主催：ふくおか博物館人材育成事業実行委員会事務局
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、海ノ中道海洋生態科学館、直方谷尾美術館)
協力：平成28年度科学研究費補助金基盤研究(S) 知の循環型社会における対話型博物館生涯学習システムの構築に関する基礎(研究代表者小川義和、九州地区研究分担者：緒方泉、三島美佐子 他)

Others

その他の活動状況

運営委員会

平成28年 4月27日(書面回議)
平成28年 6月14日
平成28年 8月26日(書面回議)

団体見学

平成28年 4月19日(火) どんたくクラブ 30名
平成28年 5月10日(火) 上海大学博物館 4名
平成28年 5月17日(火) 工学部応用化学科同窓会(渡辺元理事ほか) 30名
平成28年 6月 4日(土) 九大会(九大教員OB会) 15名
平成28年 6月11日(土) 九州産業大学学芸員養成課程「見学実習」 40名
平成28年 7月 2日(土) キッズ・ミュージアム・スクール(九州産業大学) 15名
平成28年 9月28日(水) 上海财经大学 4名